

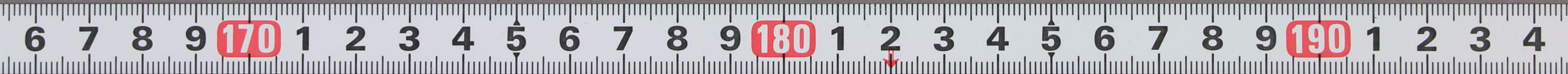
季寄  
註解

改正月令博物笈

十月部

二

十四







十月之部目錄 △印ハ俳諧の季  
をり門物あり

青 卦月支 謝子 陰陽生  
先三註 十月異名 先三註

大雪 卦 冬 到

冬至賀 卦 陽嘉節

獻履襪 履長賀 履奉る 襪奉る

赤小豆粥食ふ 卦

日令 朔 朔旦冬至

脣奏 朔 相嘗祭

筑前宗像祭 上 吹革祭

空也忌 上 鉢叩 曉録可

都新津島 上 平川祭

春日祭 大原野祭 鬮わり神祭

吉田祭 山科祭 平野祭

梅宮祭 中山祭 松尾祭

五節帳臺試 五節舞 帳臺の試





十月	相録	殿上淵醉	狩使
中	寅	鎮魂祭	新嘗會
中	卯	童女御覽	豐明節會
中	辰	日陰鬘	
中	巳	小忌衣	
中	午	伊三島大明神祭	
中	未	子祭	大道陸神祭
中	申	江日吉臨時祭	大師講
中	酉	掛鳥	南御祭
中	戌	後日能	親鸞上忌
中	亥	都宇賀祭	都加茂臨時祭
中	子	御火燒	神樂
中	丑	庭燎	神樂哥
中	寅	月令	神持哥

△十歲△早哥△吉利星△得錢子△木綿作	△阿知女	△採物歌	△大前張	△山神祭	△髮置	△顔見世足揃	△歌舞妓顔見世	△綱貫	△標	△雪竿	△時令	△雪吹
△月立△朝倉△其駒△竈殿哥△酒殿哥	△抄△片折△餅	△榊△幣△杖	△小前張	△曆賣	△袴着	△かき足揃	△顔見世	△雪車	△雪占	△雪垣	△雪作	△ゆききたる
△難波瀉△前張△階香取	△諸拳△葛	△榊△幣△杖	△大前張	△曆賣	△袴着	△かき足揃	△顔見世	△雪車	△雪占	△雪垣	△雪作	△ゆききたる
△井奈野△脇母古	△抄△片折△餅	△榊△幣△杖	△大前張	△曆賣	△袴着	△かき足揃	△顔見世	△雪車	△雪占	△雪垣	△雪作	△ゆききたる
△磯等△條波△殖槻△総角△大宮△湊田△菴	△抄△片折△餅	△榊△幣△杖	△大前張	△曆賣	△袴着	△かき足揃	△顔見世	△雪車	△雪占	△雪垣	△雪作	△ゆききたる







正月ふりつる月と有△復月ハ漢書

一陽来復とる月なり△天正月

も周の正月と同一義ナリ△暢月

ハ禮記の註、陽久しく屈して後ニ

暢也△暢月といふと仰り△幸

月ハ同音註又幸と克なりと有て

萬物よく克るといふ義ナリ△陽

と一陽来復とる月也△名づく

○秘藏 秘蔵とあり月

つゆりけとつきのをを秘蔵は

秘蔵とあり月

莫傳 なき月

ふもにふかす神話の神功月

あまたいづの今やあくらん

同 ちちちち月

山風とあり月といふあり

とこハ志されてありぬありけ

蔵玉 かくる月

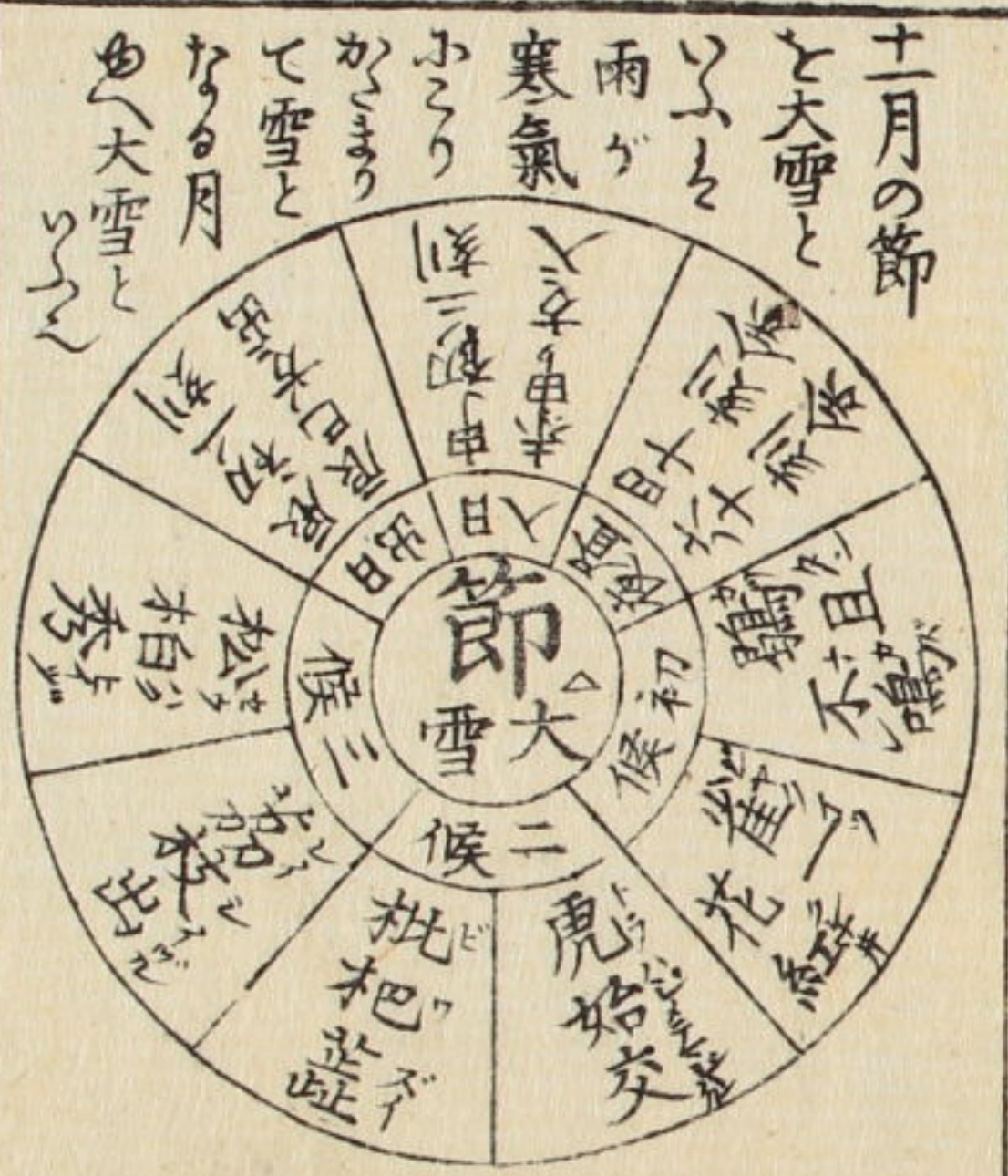
あまきくともつきの神功月

はつさくこんれきのちやき

同 雪見月

くろりつる雪のちちちち見月

今朝こそ雪のちちちち見月



十月の節 大雪と

○鶡且ハ雉ニ似て色黄黑夜鳴て

且と求る鳥ナレハ求且鳥ともいふ

○雀一花の事本草おも見えず

いせつまびらうなるは○虎始交ハ

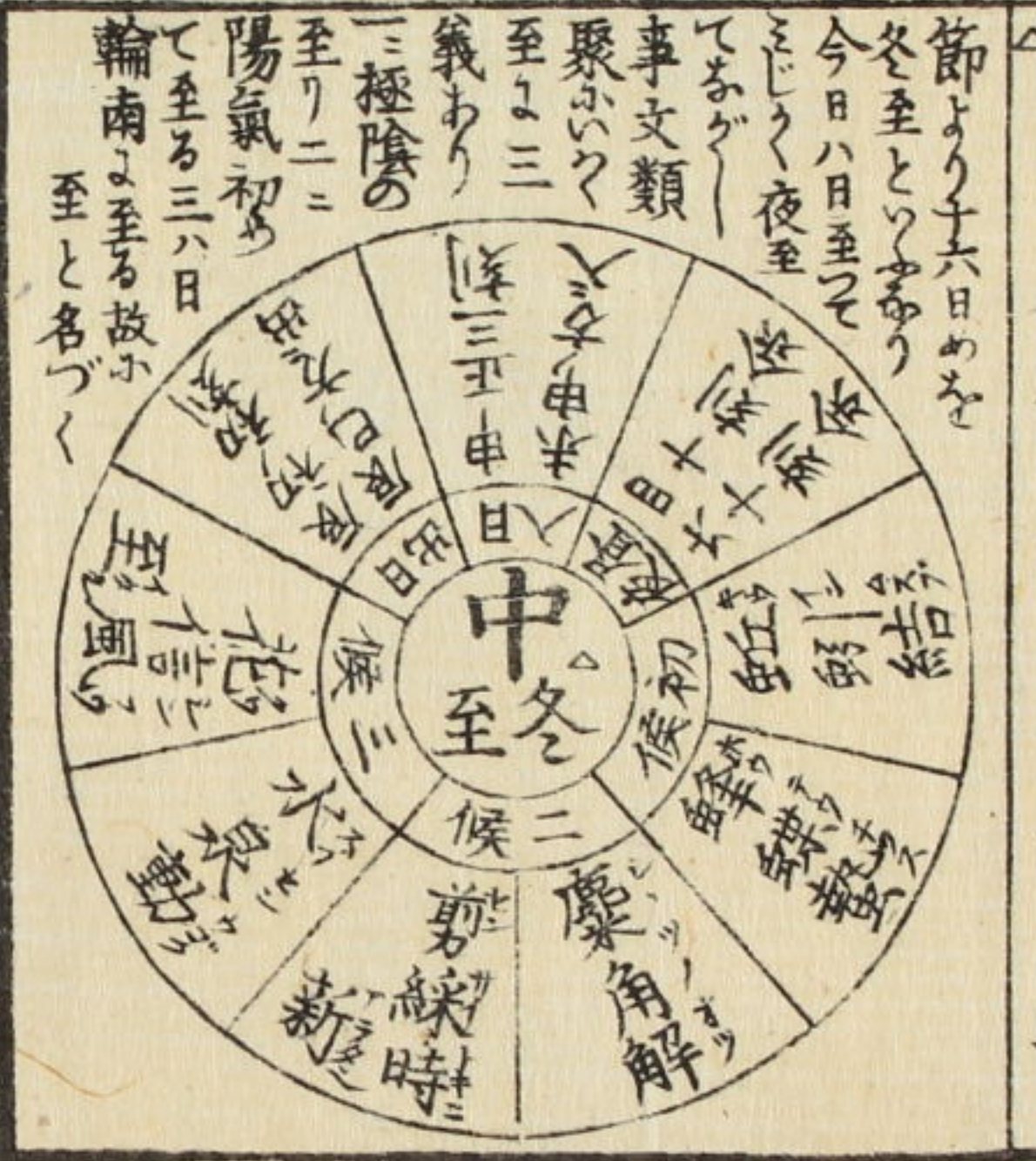


禮記の注、虎ハ陰物なる也、陽の生  
 するを感して交るといふ。○枇杷蓋  
 ありと枇杷の花並の出る。○荔枝出  
 とハ潤をもちたるの陽氣より小のひ  
 出る。○松柏秀とい冬木せぬ松柏をれ  
 ども陽氣よりよふされていやく秀る。

**節の養生** 今月補藥を吞むべし  
 尤大熱の藥を服は

節より十六日めを  
 冬至といふあり  
 今日八日至て  
 三極陰の  
 至りニ  
 陽氣初  
 輪南に至る故  
 至と名づく

**冬至** 中の名、七十二候。草木七十二候。  
 昼夜長短。日の出入等尤記



○蚯蚓結ハ禮記の注、蚯蚓ハ正陽の氣に  
 感して後ふ出るもの也、今少しの陽氣生ず

る。○蜂蝶蟄蝶も蜂もいづと出ると  
 云。○麋角解一陽發る不達て麋の角あ

れと落る。○剪綵時新正に日永みれる  
 少婦人の衣業も一線やとあるやふる剪

綵の新きも出来る。○剪綵きれ細事。○水  
 泉動陽下生る故氷たる水も泉もこき初る

○花信風至諸菜の花を催と風はそ吹至る。

**冬至賀** 聖武天皇神龜二年十一  
 月天皇大安殿ふ出御有

て冬至の賀辞を受つ云續日本紀  
 朔且冬至の事ハ朔日の條あり

冬至の日ハ一陽未復する故ハ一陽嘉節  
 とす。唐より今日ハ在京の宦人朝服を

着ハ衣内拜賀と。上ハ王候より下  
 民間みつる迄酒宴と設く祝ふる

哥一とらふ君よりひの子代こめく  
 いと長き日のなきうはのうん 為真



非老医者の浄るゝ安冬をまを順川  
下を流るも流るゝ冬をまを柳居

詩 冬至五字對句

同上

夜向三更静

一陽方動處

三夜十カニ近ウシ  
テモノニツカナリ

一陽ノ氣ガソロクウ  
ゴクトコロニ

愁添一線長

萬物始生時

物オモヒハ糸スホトホカ  
ウナツタ日ニヨクマサル

ヨロツノ物ガハジメテ  
キガストキジヤ

詩 冬至七字對句

詩礎

岸容待鴈將舒柳

鐘初動

河岸ニ鴈月ヲミツテ井ルヤウ  
ナケニキハソロクニカハル柳シヤ

カキノオトモ初  
メテウナリ

山意衝寒欲放梅

日正融

山ノヤウスガ寒氣ヲフソレズツキ  
ケルヤウハ八開カウトスル梅ガアルユヘシヤ

日カケモタイ  
ニドカニオウタ

詩 冬至詞

方巨山

至日觀書不幾行梅梢橫月

欲黄昏

至二月カケラヨコタヘテタソカレニナラフト  
スルハマダ日ノミジカイユヘシヤ

漢宮紅影無人見未必曾添

一線長

冬至 故事 獻履襪

唐土の婦人冬至の日履と襪を舅

姑よとてまつる是長至と踐の義

魏の曹植も冬至に襪を献する

表す曰冬至に履を献するハ長き

を履をまへと賀する事あるは

淵鑑類函に見えたり

律管灰飛

冬至の日室中に慢を以

て律管を葭の灰をこめおくる

赤小豆粥食

共工氏の子不才小

疫鬼とわつる平生赤小豆を食して



歳時記に出たり

冬 神農祭

唐土の人炎帝と号し百草をたれ

て薬を初めたり医道の祖神故今日医師祭アとをなす

此月田の神と祭る事 兵神農の事委しく日本歳時記に出たり

冬 天氣

冬至よまはやく降出したる雨ハ晴おそく雲

らしくと見ゆハ雨のあがるまじく

冬 占候

冬至よ此の方よ青き雲われハ来年ハ大よす

かきハあしありき氣あればひてくく黒きは水こ白きを疫病

くゆる黄なるハ火災あり但し五穀田畑ハよす

天晴まて暖けれハ来年麥よし冬至の後日よ壬の日あまハひどりあり二日よ

壬の日われハ早くまじ四日ハわれハ豊年ハ六日よあまハ大水ハわれ

ハ海はるがまじ九日われハ麥作よし十日よわれハ五穀よしといふ

冬 養生 冬至よハ陽生して日々内よ安く坐してみたり

他行まべりらば今日房事を慎むべし冬至前後婚禮まじくハ尚又。養生。詩。故事。妙術委しく日本歳時記出

日令

此部ハ十月日定つる事

朔今日世俗小豆飯を喰ふと云は日何れがハといふと李時珍増山の井

今日冬至よ當る時ハ上下とも祝ふとたると冬至よつるはとも今日ハ小豆飯又ハ小豆餅を喰ふて祝ふるべし

且ハ唐の共工氏ノ故事ハ准るもや共工氏ノ事ハ四丁赤小豆粥の処より

○今日枸杞みく湯あをすハ不老



朔 朔旦至

今日冬至至小當る事を  
つたまく小朔日冬至

より終時八日出度祥瑞  
より天子南殿出御りり節

會行り群臣賀表を奉るる  
委しく、天文修談へ奉るる

朔 曆奏

今日明年の曆を天子へ  
奉るるを主上南殿

出御ありて是を御覽あり曆乃  
とじまへ、欽明天皇十四年百濟の  
博士が奉るるや 江波等日本紀等に出

非曆奏や老の敵をどかこゆり半窓

丑天 住吉新嘗祭。今年の新米を  
日阪 神を奉る事、今日七日のあひ

二京 永觀律師忌。東山禪林寺永  
日都 觀堂の開基。天永二年今日寂し

上 相嘗祭

相嘗といふハ神々相嘗  
小きこしめさる義相嘗

とくきくアムへと讀む。今日天皇  
正禘殿に御幸なりて勅りりて

三輪。住吉。熊野。熱田。廣田。生駒  
降鋌。大和。津島の大社を祭る

其國の国司を命して其國の宮  
倉の初米を供むる先代旧事記出

○延喜式に曰相嘗祭の神七十聖有  
とあり。近頃絶つりと公事根元出

上 筑前国宗像郡

宗像祭 祭神三座延喜式出

○神體ハ素盞鳥のうらひし三女  
田心姫。湍津姫。市杵島姫 日本紀出

○一説ハ大和山城にも宗像の社ハ  
アといふも同縣の社なり

八 吹革祭

懐籥とも書。鍛工織  
荷を祭る此事三條小鍛

治より始る。昔後鳥羽院太刀カを  
くせむ事好ませりゆひて時の

名工をも禁裏へめされ十二月ふわり  
ちて其月々此番かぢをさるるを

あへ其時、まろ山の土を取るる  
用ひらる故彼鍛冶とも度々往來



していちろ山の神を拜せしより  
ついにいかりを祭る事とあれり

⑩ 北枝  
西陽  
草祭儀を体むる東田口  
酉陽

狂らのらと風居てふらの祭儀  
船史

九京の貴船結神十京の五條天神  
日都 御火焼 日都 御火焼

十の今日五加湯又浴とべ  
一の今日脊又灸とる事を忌む

十の京の栗田口神明御火焼あり  
一の花園院御忌日の京妙心寺あり

十の空也忌  
空也堂六京四條坊門堀  
川有極樂院といふ

○空也上人の延喜帝第二の皇子おせ  
わさせまふが出家とて天録三年

九月十日奥州會津にて往生し又  
京都より東國へ趣きた十月十日

なり御遺言より東國へ趣き又  
日を御忌日とし毎年今日歡喜踊

躍の念佛と修行と坊中の衆俗體

のとけ并平定盛出家とありし  
故事委し神佛祭礼記出とありし

⑩ 雪山  
非逝きし日れ空也余僧と發

十の鉢叩  
△晚鉢叩。空也堂の僧今  
日より四十八日の間洛中洛

外の火葬場を巡り瓢箪草派  
たきく高声ふ念佛和讃等を

唱ふ昔ハ鉢をたきくらあらべ  
⑩ 哥職人盡哥合

そをくらめらるる月夜を佛  
非鉢たき出をむらねれ笑ひ散支考

我門を叩き終る名鉢とき左橘  
狂らるらと見れハ芋之持とき

⑩ 信羅  
祭をを出るる又香煙の袖  
十の京新玉津嶋御火焼  
日都 有祭神杖

通姫之足利尊氏靈夢よりて  
五条俊成卿の屋敷地ハ此祠を



く即經賢法印と別當と後世ハ季吟又其男代々守るといふ

三大〇三津八幡宮御火焼  
日阪〇天王寺佛名會音樂有リ

上大〇平川祭 平川社奈良の子守町有開化天皇此地

て四月九日崩ト云ふ陵より祭神開化天皇。子守神。住言の神と三坐。季寄

の書此祭年々西度有とあはして祭此月より出は。按ふ此祭四月小行ふと三

枝祭といふ此月の祭を平川といふ。此祭ハ春日祭のあくる日行る神祇

令ふのまゝ三枝祭と同一なる。又三月中くあると公事根元より出

又三枝祭ハ平川をいつく神祇令ふ出三枝とくは。三枝とハかごと扇あり

〇顯昭の説より三枝とハかごと扇あり未廣くハ祝ふこと尚四月四十二より

春日祭 中子 大原野祭 上西園韓神祭 右の祭り春二月と當月とあり

中 日吉祭 近江の国日吉山王祭より四月嚴重の祭礼あり

四十 杜本祭 當麻祭 當宗祭

申 吉田祭 山科祭 平野祭

卯 梅宮祭 中山祭 松尾祭

右の祭當月と四月と西度あり能ふハ初めを用ゆる。四月と西冬の景物しと。此月ふる。季吟翁も句餘よりて季と定む。

五十 〇大阪の人宮の社御火焼 〇諸國ハ幡御火焼有。

中 五節帳室試 五節の舞 帳室の試

舞姫五人たりはつりの儀式あり天子帳室より出御よりて御直衣

御指貫より御香をまらぬ。清見原天白王の制。玉ひし事と

いつり天皇吉野宮ハ琴を彈き。あひし時むく。の山は雲あがり神女



天降つて天皇の曲子應して五  
度袖をかへして舞くるよりの

五節と名づく。清見原天皇御  
宇は唐土より 昆崙山の王と五

まづせ玉へ其玉闇とてす  
事一の玉の光り遠く五十両の車

小至る是を豊の明とて天皇は  
の川もきして御心をよむし琴を

彈まへし小神女空より下ると田雪の  
袖をひるがへしそれとも天からふしてこ

ざりけきかめ玉を出して仙女の  
らを御覽じたりと云々 源平盛衰記出

此説信じおとれども哥小う玉  
と讀くるはより所ある小似たり

哥 やわらもあさひすもか玉を  
たりにゆきくねあさひすを

古今天は風重れかひら吹とちよ  
乙女の正とてまほしとめん 宗貞

續後撰 月さやをを此のまのうふ  
およの袖もひよりとていつ 実雄

中 殿上淵醉

此日五節とて公卿  
朗詠今やうきう

はひらひ其後乱舞はり次第ふ  
香紙をきく北の陣をあら五節所

よたり又取々小推参らるとて哥  
うてひらふ事之此事正月三日の者

神醉ふく酒と酔といふ事 北山抄は  
非 府脱の袖物追ふや夜上人 奔吟

中 持使

今日五節所と給ひる  
雉子を交野へ持まに

遣はさる使をいつ  
哥 を日さよのあうけみうき  
かすゆくは野ふきもさしつ 俊頼

非 乃の祀ふを食まし持使 嵐雪

狂 負之の持れつういハ節季  
とくかよのさうひのう 信海

中 鎮魂祭

人の魂魄のうき  
ゆききても身れ中

去りまらしむる為れ祭之神武天皇  
元年土月宇麻志麻治命瑞寶を



つんで帝后のち祭らる是はじ  
り此神八座宮内省よあとしは  
秀吉公の時吉田山よ遷一奉る

能 魂を几巾ようつておのり 天川

中 新嘗會 △新嘗祭ともいふ  
○其年の新穀の初

穂を神小奉らせり天子御代初  
め小行りくと大嘗會といひ年毎小行

りくと新嘗會し云用明香玉二年四  
月より此事始る神代巻より天照太神嘗新  
嘗と見へれば皇八神代より有事ふや

能 釘をひく空の喜し新嘗會 白羽

哥 禪林七百首 賢はれおのすともさう  
らとておのちあふむむじ心へ 御製

中 童女御覽 清凉殿小童女と  
召して天子御覽す

るは皇八代舞ふつきくる事と

能 月淡 △何を月淡を同くす

中 豊明節會 前日神小供したる  
新穀と今日奉り置也

臣下ももろ故節會行りて

能 竹をたれをのめれき屋くか 李坡

哥 一しのおひ日新かすつたる  
そのめをひく 為家

日蔭髪 △日かげの糸△心葉  
かげのうらゝ又次の小

忌衣ハ大嘗會豊明は用ひく  
りのなり。日かげの髪ハ薙まこ女

薙まこ下り苔といふ俗は狐のくせ  
といふ艸を冠よ垂るなり又日蔭

の艸をとりて垂るるといひも日かげ  
ハ此髪を垂る日之光をいままき

を蔭つ料あり。日かげの糸ハ近代  
髪にかりに白糸青糸を組て垂

る。心葉ハ冠の中子ハ造花をつ  
くもわり今ハ金紙まこハ白紙より

心葉此料とらひあり

哥 續古今列ふおのちそのは日かげ  
叶いつのせよりかけけめせん

能 若月や公家お日蔭のまもほひ其角



**小忌衣** △山藍袖 △小忌袖 ○是公堂  
の明お着する装束にてけ

かれと忌と云心今日神樂の役當  
小忌の股上と云。小忌衣の色白き布を

春州又小鳥と云山藍をきつげる

哥 うらやまきをのめを 倭成女

日かけよみくまのく人

非 雪のくよれおし 宗因

中伊 △西の市  
**三嶋大明神祭** 祭神大山

命祭禮の日諸国より商人来りて  
諸の物を商ふ是を三嶋西の市

と云て季と云。能因法師西の  
哥當社へ奉りまひし事あり

哥 天の川苗代あよせきくせ  
あまうりまけれあふ汁 能因

非 ぬもは林あふん 麥永

甲 △甲子祭 △子燈心  
**子祭** 子△子燈心の月故子の日大黒と

考るく世俗は大黒ハ鼠とつうめと

志うといつり二股大根黒米黒豆  
なを供へ子の日祭をなげ月

毎甲子小ハ祭る此月ハ子月故  
甲子小何と云ども初の子の日と陰

○此月子日燈心を貯めれ大福  
あり子祭子燈心の事委く 歳時記  
論あり面白き事見べし

非 子祭りや大黒小白大根 鬼貫

狂 彦よきけハ果報ハ子院ハ大 貞柳

十大 △俗は泥く  
**道陸神祭** 祭マといふたり

天王寺村合法辻の辺小さき石  
佛あり此石佛の顔小米のこをぬり

供物を供へ笹と蜜椒と噺して  
踊る是を道陸神祭といふ此祭

の二三日前より村中児童出て往  
来の人ハ供物料と云ふあふされハ

繻ぬい泥ぬいをぬりて人を巻とむ  
非 道陸神の中ふせ出る芝 玉芝



狂きくまされたりと見へて及ぼす  
才流

六十 諸国神明宮御火焼  
○大阪座六宮御火焼

中近江日吉臨時祭 此祭は八建曆  
三年十月十八日

勅使を立ちよき臨時祭禮行ハ  
れるより初る今ハ中の申此日

八十 京御霊の 一 雲居寺淨  
蔵の忌日あり

三十 本日遠方へ行く事なる病入  
見舞事なる子の年の者尤慎

四十 大師講 唐の智者大師今日  
寂に依て天台の諸寺此日より今

日また大師講と修行と比叡山日光  
山等ハ此日より三日朝まで昼夜法門

有是と論義といふ民間ハ今日豆粥  
椀柴と折て箸といふ是を智恵粥といふ

非 智恵粥や何の宗をも争はば 乙由

六十 南 春日若官宵祭又御祭宵催  
都ともいふ今日身福寺の僧頭屋

田樂あり長谷川黨神前ハ泰詣  
て野太刀を擲へ馬を率是と遍照

院の渡といふ今夜亥の刻過若官神  
明の燈火をけし闇中の神體を御

旅所又遷し其後火を上げ音楽等有  
非 此祭きりて又さやを刀淫 如來

掛鳥 鳥を懸て懸といふをいふ  
鳥獸を懸て懸といふをいふ

雉羽兎狸等なり此日より此五日  
はく春日の神官此獸を改む是

を獸改めといふ

非 掛を鳥部系不獲所の骨筋版 静夜

七十 南 御祭 春日御祭ともいふ  
春日若官の祭なり

若官の御旅所ハ春日の安宮と  
といふ常ハ官もたなく芝原あり

今日の御祭りハいかりに御殿を  
營み若官を渡御なし奉る妻



年八月十日に此より御殿の材木は大和國中より所々をくぐり例式よりくぐり木を伐出し春日へ奉る九月朔日御繩棟の式例あり當月廿日六神殿の造營あり廿六日の夜御旅所へ神幸あり嚴重の儀式あり關白殿下より騎馬の俗人等つうはらふこれ廿日使とりし御祭は崇徳院の御宇より始るなりや

哥

後村上院御製

きつらりや言るをまけし春日也ふをくまお月も神をさるなりや

俳

神をさるを鼻てかおるは祭来山

北八日 後日触

今日春日ふ触り祭禮の後故なるなり

北八日 親鸞大忌

報恩講。南宗の宗祖親鸞大

弘長二年十月廿八日小寂以壽九十歳より故は廿日より今日迄

報恩講を修行し俗御霜月と云

俳 消ぬがらあつまる霜月秀頗

北九日 宇賀祭

京九條に有此所の東西の辻と宇賀

の辻といふ倉指魂神訣の博物怪の辻

下京 加茂臨時祭

北祭ともいふ此祭は寛平元

年十月より初る。かうは花吹雪として次身はこれを献じて使符にけりといふ式あり清涼殿より出御ありく行はるは涼身を出り

哥 夫木

季經

林山のみでし馬はあけえい〜 大い人のかきんふらふら〜

俳 冠をさる〜れは〜ら〜ら〜 瓢山

月令

此部は八月れき〜まら〜る〜 十月一ヶ月の事を〜る〜

御火焼

此月所々の神社にて火を焼湯を奉る是は神樂



庭燎の余風まろべし夫く社まで  
行つて日違へりゆまし前くの日の  
取よ記に。此月御火焼をなれ地中  
ある陽氣を追出以訣歳時記拾遺

神樂

△東三條御神樂 △山神樂  
△里神樂 △昔天照太神

山戸ふりし時諸神岩戸の前  
あつまり庭火をたれ新しうひる

事有神代表ふ出今神樂を行つた  
其余風をり故に行ふところ物

皆神代卷まるく△東三條  
の御神樂下の卯の日といふ昔ハ

東三條重明親王の御宅より其  
辺より両社の神有仁平三年土

月下卯の日神樂は奉らせり  
事拾芥抄其外諸眷出今ハ絶り

△山神樂といふ禁中内侍取  
行つたをり△里神樂といふ禁

裏の外神社より行つたをり

哥拾遺

触宣

あつたはれしころをたれしころ  
ひうけもそひしころをたれしころ

新古今

貫之

をく手おさるもかからぬわがはの  
かき帯は人のまぢりきり

雪玉 詠月前神樂

うらみたる早れひくも天の戸乃  
あやぐ月よかけをまへへ

連はつきはや万代のあまの山 宗碩

うらみおれおほききまなは 宗養

汲ほよきいよきしよは津糸 紹巴

非おれおほききまなは 野水

狂人の面ふくも月のおほくらみ  
さえたる常もすまねねく 為国

哥 夫木 里神樂 入道前関白  
山りやいつくもまぬ里神樂  
くまをる常いふおまへし



⑥ 縁炬子も何うや里神楽 白羽

⑦ 狂から火を照らしたる 船や店

甚りろく甘い里神楽うな 金山

庭燎 神樂の時焼火。火處焼とハ  
取々此庭燎を奉る事と神代卷出

⑧ 堀川百首 公實

天と川を神の心をとらむるや  
庭火の烟をよとらむるらん

家集 詠庭火神樂 小舟

ふきくもる庭火のあれをのまを  
んまもてや神をまきくらん

⑨ 糸細ふはひくし庭燎ハ 三惟

神樂歌 神提歌 △千歳 △早哥  
△吉々 利皇

△得銭子 △木綿作 △晝目 △弓立

△朝倉 △其駒 △竈殿哥 △酒殿哥

○右ハ神樂の時くくくし物の名く  
神提哥ともりつ。千歳の哥ハせんさい  
せんさいせんさいやふとせのせんさいやま  
さいまさいまさいまよるのまんとや

右の外。早哥。得銭哥。酒殿哥等  
ハ皆々一首づ哥有委しく補遺不出

○右の外尤記採物哥。阿知女  
神。大前張。小前張等ハ神樂催馬樂

のくくし物の名くくくも季まは然も  
人倫植物ハ何れも貞徳翁ハいつり

尤謡物名目ばう句よよてハ本ふる  
くくし神樂の謡物と體ハ團ハ季まは

阿知女 是も神樂の謡物の名も良  
し説多し委しく補遺不出

採物歌 △神幣 △杖 △藤 △弓 △鉦  
△校 △録 △折 △諸 △奉 △勸

是ハ神樂を舞人。さうに。幣。弓。勸  
はことまふらちて其もふら物の中

を哥おつてうてうて故ふらんりの  
哥といふ。哥ハ補遺不委しく出

韓神謡 本 入まよふらんり  
わけらんらん神のわんをまき

せんやかきまき ○未 ハひんそまふまも  
らてまららんわんをまきせんやんをまき



○まきまゆハ伊豆国三島とりの  
所より出る木繖ハ木綿ハ紙に  
はくる木なりそれを四手おして  
かきよとりうけ神を祭るにから  
るゝとハ宮内省より一ツハ韓神  
二座を中と名 祭蓮葉葉抄

**大前張**

△小前張。是も惟馬樂  
の識物なり大前張の哥

七首小前張の哥九首有各目はる元  
ふ記に一々哥阿れし哥ハ補遺ふ出以

大前張哥の名 △宮人 △木綿志天 △難波  
瀧 △前張 △階香取 △井奈野 △脇安

古 △小前張哥の名 △蒲枕 △閑野 △大  
宮 △磯等 △篠波 △殖槻 △総角 △

湊田 △菴。神樂謡物催馬樂の訣  
くりく補遺ふ出以

山神祭 所々山林にある事あり  
木の上は四手を切りか

火を焚祭るをとりこれも庭燎の  
余風なる也

**曆賣**

△(非) 曆賣ころい男乃の  
淡水

**髮置**

世俗ハ男女とも三歳又  
あれハ十月十五日又ハ吉日  
をあらひ 髮置綿とて。白髮綿  
。松。橘の作は花。末廣扇など  
童のりもゆひぎにゆひつけ産  
神へ参詣きたりその日乃食  
膳ハハカ十頭とらへ魚菜ハ小石  
を膳のちちり付る是一生々んご  
りて齒のむらうらんやうよと祝  
ふ心とと高貴の御方も三歳  
みちるせあふ時ハ此御祝儀らう  
作は花を頭又髪も高貴に例へ  
哥源氏葵髪をき 団うらむらひら  
後のはらふまのおひやく未我のこみん

**袴着**

△(非) 袴初 帯解。紐直。氏  
家の男子五歳よりある時

ハ此月吉日とあらひ袴着ととあら  
て基盤のうへへく上下を着る



△**初**の京の女子七歳まで著初る大阪の女子四歳の時當月吉日と多くひ着初るしむ初の日ハ他国ふらしむりけきぬとて女の白きをぬをうきせ歩行しむり近頃の其きぬふりやを條たるをけきこと△**帯**解とひ紐直の事あり女子五歳までハ帯をせ紐てむとびしが五歳の當月より帶は改むあるひハ七歳より改むあり

○**高貴の御方ハ五歳まで御袴着**九歳の御時御紐直臘月吉日とあるんま行るころ

**哥**源氏裳着のうめやあきつをまつまてゆるきるをまればころ  
**非**袴は女子ハ袂履はもと即ち素流袴は女中の中ふ布をまく承房  
**狂**いも子ハ扇はちんちん袴のちんちんここの教んこや 百駄

**顔見世足揃** △カぶき足揃。乗込ともいハ大阪にてハ

**顔見世**の初る前夜役者その芝居は集りて五盃をあけをり

**歌舞妓顔見世** △顔見世△顔見世手打ハ大阪よ

てハ當月役者の出交りあり此月座元をさる見役者を一年の充めてかゆる初めハ顔見世と唱へく十日の間夜子の刻より芝居を興行して一座の役者のころに<sup>け</sup>出て見物へ名乗とまし其後銘を得手の藝をなれ役者見物へ名乗とまれ時手打といふ事あり是ハ若者十人も廿人も連中とくはへく組とあり和め言葉を声よく識て柏子木をまら此柏子甚面白し京都の事ハ年中祭礼記委く記ハ

**能**顔見世や暖いさむ下邸の袴 其角  
 顔見世や天橋梁の火見守 安靜



靛見世や蛸舟の火ハ跡ヲタリ 涼角  
靛見世や伴約と庚多果を鼓 周平

綱貫 (非) 徑平や大坂おんれ  
五師の儀 雅有

雪車 板より四方をからし櫛の  
如く作て屋根を後下り小

拵へ北地の人ハ是ふのりて雪の上を  
往來するに箱雪車ともいふ又荷

車の車ふき如き形お拵へ荷物を  
積り雪の上を引ゆくも雪車といふ

○唐の輶の輶といふ物ハ板を以て作て  
足ははき泥の上を歩行具手圓會なり

哥堀川百首 初とゆきふりよ々じま  
ゆら山紙の旅人さうふのさまく

○山紙の紙死をいふ言なやぶりの乃 竹夏  
のやを車返車もやむくと素啓

標 △櫛も △合も △右も △又も △又も  
△かしき。北地の人ふりき雪の

上江歩行為は藤とささむてゆ丸  
きまらんじの如く作てささむつのか

そくともやまはかききまらんじ

○積る雪は測をぬふむかきし素芹

○夫木かききく紙の山紙旅をも  
空にまつまぬ男をかまらんと 仲正

雪香 革の香足袋の如くしとく  
ふくひさ頭まで及ぶらの又

○雪雪や踏ては松の香ほせ 宗隆

○初音のいてわつしとる雪の  
ひもむよふるよふるよふる 伊貞

雪竿 雪深き国より人往來の  
便の爲に竿を立て標とす

○夫木 大炊御門家位  
紙の山紙とさく竿のくひりなまき

○雪竿やうらうら谷の今まで 五樓  
雪の干や人ももてる菊の後 布門

雪垣 雪ふりき国はあづれとぬぬ  
申しにぬる垣なり

○雪垣やはれと丁のぼり居 李郭



時令

○又ハ田を記し十月又ハ三冬の季にも用ゆるものあり

雪作

北国ハ雪降そえとする時あるらば雷なり是を雪と云

雪吹

雪風と書。雪風文に吹をり

非

非かり傘ハ雪ハ金取ハ雪ハ市涼とこそてらるる相の雪吹ハ任里

ゆき

ゆきなれ 北地の山道ハ旅人まじり雪風ハ吹

は

はれ雪 音通ハ雪ハ北国ハ事あるは北国の寒る事はをりゆきハゆるべし

非

非水の干ハ雪ハ此雪の海一井

哥

夫木 主殿

か

かみ雪 雪のこまりありて地ハ落

雪

雪ハ手ハ平ハ雪ハ風ハ時雨ハ雪ハ風ハ

雪

雪ハ風ハ時雨ハ雪ハ風ハ

雪

雪ハ風ハ時雨ハ雪ハ風ハ

雪

雪ハ風ハ時雨ハ雪ハ風ハ

雪

雪ハ風ハ時雨ハ雪ハ風ハ

雪

雪ハ風ハ時雨ハ雪ハ風ハ

雪

雪ハ風ハ時雨ハ雪ハ風ハ

雪

雪ハ風ハ時雨ハ雪ハ風ハ

雪

雪ハ風ハ時雨ハ雪ハ風ハ

雪

雪ハ風ハ時雨ハ雪ハ風ハ

雪

雪ハ風ハ時雨ハ雪ハ風ハ



**しら雪**

雪が石又は木とくく見立  
ふりつりたるを見立

ふる雪とりりたり心ゆくべし

③風後木くみ雪のつぎる五原

**雪轉**

雪まろけ  
雪中の戯まふさる雪

④花のなを後流の影ふるまろけ千楓  
女房の力多くやそめこりー 去来

**雪佛**

雪達磨  
雪布袋  
雪兔  
雪獅子  
雪おて

佛まろけハ獸の形を作るとし

⑤雪佛とゆふ丸き目まけ由  
同よりふんとも口も口もふも免文字

**深雪**

ふくふくつらつら雪を  
いづら

**雪女**

雪ふくつらつら時ハ陰氣凝  
つく怪し形をゆふ

⑥はきれ君と名はむ雪女 室庸

**雪やけ**

霜やけといふ如く極寒  
の節の病之〇一説ハ病

あはばちみくあつきをいふ雪は  
うるといふと同じ雪あがり次より

**雪明**

唐の孫康といふ人學文  
を好むは家を負ふし

油なし雪中ハ夜雪の明りふて書  
をよきつは御史太夫といふ官なる

⑦是とも善れは善く雪あがり瓦砾  
かゝる書小夜とくは雪あがり舟子

**氷柱**

氷水  
氷筋  
氷筍  
簷の下れ

滴る水の氷まるく山中の樹梢より  
たゞつらハ凡一抱ふも及べし

⑧雪玉  
はちさけのくみの初  
尾死さそおれ妹うと

千載  
ねんつらなまらるる氷水 經房

⑨本とのまどつらぬくつら正種  
山のまらつらかかへくは雪は鬼貫

⑩村の中まらつらの雪をまらり布門  
松の雪若ふつられさうり其角



霰

雪と雨とまぜりて降るといふ

哥 夫木

經家

かきくまふれき指に夜う那

みそれるを山う下のさそあまら  
こころ余るをのさるる 家隆

連 水さるき屋みそれの名跡宗祇  
みそれせ 梅香水もまはる宗碩

山さみそれしあろき物日 周桂

俳 みるる鳥野取くこり付支考  
空澄る那家うき告る霰る其角

狂 ちうけにかきてゆくさこそれ山  
光山

狂 さけそしねひさし出しうと  
とそれのかさのはる合もさし 貞徳

詩 霰ノ詞

寒光帶雨山難白 二ツツテクルニ

イカホドフツアモ 冷氣侵人火失紅  
山が白クナラヌ

サムサガ人ノカラダニコタ 古撒明珠跳瓦  
ヘテオコツタ火モキエヌ

上 ハラクトニテ玉がヤ子ノ 輕敲碎玉  
ウニトアカトオモヘバ

入窓中 サラクトクタを玉が  
ニドクケラフヘチツテクル

電 凡電ハ皆冬の陽をわらま  
り夏の際に伏せるなり

哥 萬葉集

あつれうらうらとね系伝の江に  
兼日ぞとあつれとあつれうら

續古今 土御門院

あつれうらうらとね系伝の江に  
兼日ぞとあつれとあつれうら

新續古今 定為

あつれうらうらとね系伝の江に  
兼日ぞとあつれとあつれうら

詞 風ハ 風ふちる風  
さゆる風またゆる風さゆる風

まよせぬ 雲ハ ながびくゆるまの雲  
はるまの雲ふらむき 笹ハ ぬさく

小ぶる雲のまのさあやぶる雲



おのりなきかたきあふまのくもを合せたり  
 竹ももねふしけり音せめてよよみ  
 合も物おハ。夏まひる。夏まどあふ  
 のまふくる。夏あふ。窓らひ  
 。窓うちあきる。縁のうらあふ  
 音もどきふる。又ハ萩の枯れま  
 きたゆりけしとまふり  
 木三ハ  
 旅の権は。山のこもりし。かしは  
 。まふ。一本のは。紅葉ふ。あふ  
 及びし。板や。おとせぬ。あき  
 。柴の戸。あふり

①連 物ゆれをて候のまゆり宗祇  
 玉もれまふりあふりれ宗因  
 ②非 茶屋あふりまふり不波は其角  
 ③狂 あふりあふりあふり一夜の  
 のんであふりあふりあふり 貞柳  
 ④ かなはけのあふりあふりあふり  
 音もあふりあふりあふりして 貞女

詩 電ノ詞 林信

飛 霰 麩々 數十程  
トキルノヲ見ワ  
 クスニヨホド 寒風吹面 巨堪行  
イサム  
 一ラク見ユ 雨流 鞋底 星如 并  
イサム  
 セカカホヲフイ テアルキニクイ  
イサム  
 アツテ星ノトフヤウナ 雪落 笠 簷 花 未  
イサム  
 アツテ星ノトフヤウナ 雪落 笠 簷 花 未  
イサム  
 成 雪ノヤウニカサノハニカラ  
イサム  
 オナアモニガ花ハミエヌ

雷 蛸 蛸 吐  
イサム  
 唐土の川 居 軒 云  
イサム  
 人 嵩 高 頂

小至日又大なる蛸蛸 数百あり  
 長三四尺此蛸蛸水邊に集る  
 各水を取る 蛸は口に入ると即  
 電を吐く 事 蛸の如し 蛸は  
 て地は満つ 忽 震 雷 起 して 雷 昏  
 失し去る 明日 人 来 たり 昨 午 市  
 中 電 大 なる 云 乃 蛸 蛸 なる  
 わが なる 所 なる 事 堅 志 なる

鐘 響 ぬ  
イサム  
 鐘の音は霜夜に  
 なるなるなる







夫木（？）とれい雪のち山（？）はくをん  
 行へいふぬ魚のありいふを 寂蓮  
 ○平家物語小朝拜の文ふ日  
 いつとあふふふふふふふふふふふ  
 苦もふふふふふふふふふふこれに  
 ようておりいふふふ水もれをふ  
 ふふふふふふふふふふふふ

**非**寒者（？）向（？）を松の夢（？）と一季坂

**杜父魚** ちれ降る時出る魚（？）のいり  
 魚（？）といふ（？）船（？）本（？）出

谷川ちふふ多し此魚入をふふふは  
 只ふふを泥の中へ入ふふふふふ  
 ちちちちちち船の町のふふふふ  
 るふふのく名づけふふふ

**非**か（？）ちちちちちちちちちち 朝雄

**鯿** 六月頃小なる時をツハスと云  
 西国ちてワカ十九月一尺許

のをメシロといふ十月ころ二尺許ある  
 をハチチといふ江東ふてイナタといふ  
 冬の特長してブリと云大なるもの

三四尺ありとく出世魚と称して  
 塩ちちち鯿を歳暮に祝儀に用也

**非**十（？）ちちちちちちちちちち 支松  
 鯿（？）あふ中居るふちちちち 其角

**常用** 此部（？）の十月一ヶ月要用の事  
 養生天氣食物等記に

破	夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
軍	寅ノ方	卯ノ方	辰ノ方
向	朝六ツ	朝五ツ	昼四ツ
方	巳ノ方	午ノ方	未ノ方
	昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
	申ノ方	酉ノ方	戌ノ方
	暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
	亥ノ方	子ノ方	丑ノ方

**日刻** 亥ノ日子ノ日亥刻子ノ刻  
 事とるは用也べふ

**方角** 家普請他行東南の間（？）向  
 しては此月天道東南へ行故

**樂事** 霜のゆゑこの神（？）ふふふ  
 身おしひほふふふふふ

おふふ折くのらふふの音を  
 炉邊に聞えふふありて酒宴ふ陽



氣をささぐる夜むさしやど  
此頃のささぐる夜むさしやど

**生薬**

山茶花 早梅 太山檀 茶花  
伽羅木 このあしハこぞ花

**衣製**

黄菊 移菊 龍膽 五節

**初雪衣**

面白 裏紅 蒼紅梅 面紅梅 裏紅

**天氣**

こ午北方の雲ハ風。風の後  
ハ雨。北西の風ハ久しく吹

事まし。朝日十九日雨風とつこと  
ど。冬至の後の北風ハ半日一日

みくやむ南風も同然よりうまじ  
南風を雨よちうまじと多し

**占候**

雷あんば来春米高し  
虹あまハ俄々大豆高し

日蝕あまバ来年大ふ不作。夏  
の冷行れハ疥癩の病多し

**養生**

此月つめたる物を枕ふは  
べつて人の目を昏くも

あまこまのやん蟹龜やうの甲  
何るものをささぐる人の神氣を  
損じらる。其外養生の法を妻  
しく延壽養生論より出で故に略之

**飲食**

此部ふハ十一月一ヶ月の食  
物の類をあらわし出で

**新子燕**

非位まけかしひあつ  
まのけ子 立圃

**于大根鈎**

香の物大根于と  
當月冬至後早く

于根よりと久極寒よあれど  
いてあし

**澤庵漬製**

此漬やうハ沢庵  
和尚としめく

製せられし名づく漬法  
大根百本 塩三升 糲三升 糠一斗

右常のおくく漬るるはし  
糠内五升 熬く用也

**于菜鈎 于燕鈎 かけ菜**

于菜鈎 于燕鈎 かけ菜



青干菜

大根の葉を繩でゆいて  
軒からふかけて干す

あられ酒

餅米を蒸て酒とも  
ふ醸したるものあり

南都の菊屋に製する物名産  
常あられとも名よめる

みぞれ酒

あられ酒の少しふご  
あつまるものあり

用意品

当月菊の雨霰を  
さるべし菊の花弁

くおころふ所の上を切べし土地  
と見立く種をうつく作るべし

委しくハ菊品とする本お出右の外  
青柚葉つきのみ、久しく貯

へる法ありハ柚餅。金柑をし  
九年母をし其外菓物多く

貯せし当月製するよし何しの  
訣委しく

日本歳時記  
茶湯料理拾遺此二本は出  
ハ指南抄ハ茶湯會席の献亭より  
平生の料理月々ふりけり記

王月終

十月飲食 並料理献立

禁 龜 蟹 鷓鴣 干魚 魚 生肉

物 生の 蕪 生菜 又火う

焙肉と食ふべし

好 雞肉 九月より此月を食  
物 べし 稍補あり ○ 雀肉 冬

食ふが 委しく  
十月の部はあらず

料理 汁 魚 ねぶる

かさこころ葉 玉子 岩かけ

大根をろし 鱧・皮ぶやう  
葉つこころん 玉子

膾 さいふ・赤がい さいふ・大こん  
さいふ・大こん さいふ・大こん

きんし玉子 紅あいで・うらげ  
さいふ・大こん さいふ・大こん



清汁

すて貝  
ゆまのり

かも  
ほろし

目

綱

綱

綱 小さい田  
大こん・うど  
あんをす

鯉・うた多び  
ろく・わう風  
とさび

あまこ 小なこ  
とさび・いりほ

鴨 かわか  
あんをいりほ

煮物

ひしど  
玉子豆腐

かも けき  
かぶた  
こうろぎ せうご

候 やま綱  
くづあん  
せうご

生あん  
くづあん  
とさび

せうご  
玉子豆腐

雁・あまび  
あまび

無さ

生綱  
孫ぎ ころ

和會物

敷のこぼ  
ふごあん

いり  
ごあん  
同上

玉子白  
うど・あん  
まあん

むきあん  
あん  
同上

生あん  
あん  
あん

吸物

鮎の子  
茶せん孫ぎ

焼あん  
まのり

鏡のこ  
孫ぎ小口

鯉引皮  
干えせう

志  
ごのみ

精汁

松身  
松身

孫い  
皮ごあん  
いり

去めド  
まきまき

せり  
なめしけ

あん  
干あん

新こ  
やこ  
やこ

けし葉  
やこ  
うど

あびあん  
ごあん  
木のこ

清汁

松身  
ゆのよ

いり  
あびのこ

ちん  
らう  
らう

生あん  
こ

膾

大こん・えす  
あび  
本をげ

あび  
木  
せり

ねろ  
木  
あび

あび  
あん  
健康

大こん  
はを

あび  
塩

差味

あん  
あん  
あん



ぶんどうりやー  
らぶまさんく  
あうさけせん  
あがふ・かう  
や・本んらび  
かう・さんばせ

**煮物** 大かづら  
らぶらん  
大んえん  
らぶ

そののいも  
やきふ  
あがふ  
れーかん  
大志あト  
えきいも

なせひとき  
やきふ  
大かづら  
あがふ  
あがふ  
あがふ

**和會物** 大こん  
あがふ  
あがふ  
あがふ

黒くま  
あがふ  
あがふ  
あがふ

**時鳥** 大こん  
あがふ  
あがふ  
あがふ

**魚** 大こん  
あがふ  
あがふ  
あがふ

あそひそ  
あがふ  
あがふ  
あがふ

**青物** 大こん  
あがふ  
あがふ  
あがふ





